



1 特定外来生物「オオバナミズキンバイ」について

先日テレビニュースにおいて、愛知県にて「オオバナミズキンバイ」が発見されたと報道されました。

この「オオバナミズキンバイ(Ludwigia grandiflora:アカバナ科チョウジタデ属)」は、南米原産の多年生の浮葉、湿生植物で、日本では2014年に特定外来生物に指定されています。2005年に和歌山県で、2007年には兵庫県加西市で野生化が確認され、2009年には琵琶湖で発見され、急速に拡大しております。現在では、近畿地方のほか、東北、関東、九州地方でも定着が報告されています。繁殖力が非常に強く(1株から数百から数千の種子を生産。地下茎でも更新します。)、成長速度が非常に早く、在来水草や生物の生育場所を奪い、一面を覆いつくすことで水質を変化させ、魚や水鳥の生育にも悪影響をもたらします。大群落になると駆除は極めて困難になるため、まん延防止のため早期発見、早期駆除が重要となり、行政も注意喚起しています。



現時点では、農地への侵入事例は少なく、被害報告も多くありません。しかし、農業用水路で繁茂している例が見られるため、今後農地へ侵入する可能性も考えられるため、継続的な注意と対策が必要です。

<特徴>

- ・ 水辺や湿地に生育し、水中・水上の両方で葉を広げます。
- ・ 夏に黄色の直径4cm程度の大きな花を咲かせます。
- ・ 増殖力が非常に強く、地下茎や切れた茎からも増殖し、水域の環境では素早く広がります。

<対策のポイント>

- 1) 根ごと除去: 栄養生長で、残った植物体から再生するため、可能な限り根ごと除去し刈取りした植物体も適正に処分します。
- 2) 発見したらすぐに除去: 増殖速度が速いので、発見次第即除去します。
- 3) 拡散防止が重要: 植物断片からも再生するので、断片を残さないようにします。
- 4) 継続的な駆除・定期的な確認: 1回の除去だけでなく、継続的な駆除と、定期的な確認を行う様にします。
- 5) 種子をつける前の除去: 開花期の6~10月より前4、5月がの除去が効果的です。
- 6) 機械除草は不可なので、手取りの除草や泥上げ作業を丁寧に行います。
- 7) 水路で見つけた場合は、無理に広範囲に触らず、「断片を流さない」ことを最優先で対応してください。



2 猛暑に負けない稲づくり ～ケイ酸肥料について～

けい酸(ケイ素)は、水稻栽培において「肥料の三要素(窒素・リン酸・カリ)」に並ぶ重要な成分とされています。特に近年の酷暑や登熟不良への対策として、その重要性が再認識されています。今回は、そんなケイ酸の効果についてご紹介させていただきます。

<けい酸の主な効果>(4つの柱)

1) 倒伏防止と受光効率の改善

けい酸の吸収により、表皮に硬い組織(ケイ化細胞)が形成されます。これにより、下位節の茎が強くなり倒伏しにくい稲となります。さらに、葉が上向きに直立し、株元まで光が届きやすくなる(受光態勢の改善)ことで、群落全体の光合成が高まりやすくなります。

2) 高温障害・冷害への耐性強化

根からの吸水力を高め、葉の蒸散を適正に調整することで、異常高温時でも葉温の上昇を抑える働きが期待できます。その結果、乳白粒・背白粒など未熟粒の発生軽減につながります。また、細胞壁が厚くなることで、低温・乾燥などの環境ストレスに対する抵抗性向上も見込めます。

3) 病虫害への防御効果(物理バリア)

ケイ化細胞が物理的な防壁となり、いもち病などの病原菌侵入や、ニカメイチュウ・アブラムシ等の食害を抑制する方向に働きます。

4) 根の活性維持と「秋落ち」予防

けい酸は、根への酸素供給力を高める方向に働くため、夏場に有害な硫化水素が発生しやすい条件でも根腐れしにくい状態を保ち、秋落ち予防に役立ちます。

<けい酸の施用タイミング>(追肥の狙い目)

稲がけい酸を最も多く必要とするのは、幼穂形成期～登熟期です。

この時期に合わせることで、倒伏軽減と高温障害(白未熟粒など)抑制の効果が出やすくなります。

適期目安:出穂の30～45日前、散布の勘所:目安として中干し前～中干し開始頃

中干しで土が硬くなる前に散布すると、資材が土に馴染みやすく、吸収効率を高めやすくなります。

<ドクターケイ酸 10 試験>試験場所:北海道 品種:ゆめぴりか 水口流込処理 1本(1.25kg)/10a



ドクターケイ酸 10 処理区



無処理区 (アグロネーション(株)提供写真)